

今どき

学校の男女平等教育

最も男女平等意識が浸透しているといわれる初等教育現場として訪ねたのは東蒲田にある大田区立東蒲小学校です。周辺地区は若い世代が多く、子どもも多いのでは？との思いに反して全校児童数270人、10クラス。公立小学校で6年間クラス替えができない年度があることに、少子化を目の当たりにしました。

男女平等は、もうあたりまえ

早速、青山一男校長にお話を伺いました。「小中高を通じて学校での男女平等の取り組みは、人権教育の大きな柱のひとつです。東京都教育委員会は『学校教育における男女平等教育・推進上の基本的な考え方』を記したテキストを毎年全教員、管理職に配ります。また教職員への研修も行っています。ですから東京都であれば、どの学校でも本校と同様のレベルで人権教育が実施されているはず。すでに男女平等推進のスローガンを掲げるま

でもなく、あらゆる学習の場に男女の区別はないでしょう」と明言されました。

ランドセルの色に男女の区別がなくなっただけではないのです。名簿の並びは男女混合。かつてのようにいつも男子から先に呼ばれることはありません。整列も男女混合の身長順。学習、遊びも一緒。先生が児童を呼ぶときの呼名は男女とも基本的には「さん」。ナカタさん、ヨシオさんです。

例外は、子どもの成長に伴って区別する配慮が生じる更衣室、保健検査、また移動教室の時くらいとか。

「男女があらゆる場で区別なく一緒に学習し、活動することは教育現場での基本スタンス。子どもも抵抗なく受け入れています」と青山校長。体力差が出る場合でも、運動会の短距離走はタイムで組分け、ピラミッドなどの団体競技もできるだけ男女混合で実施できる工夫をしているそうです。

「女だから、男だから」ではなく

現在、東蒲小学校では、不登校ゼロ、学級の荒れゼロを更新中です。青山校長は当校への赴任時に、「職員室に笑いと寛容」を感じたと言います。先生方が学級や学年だけでなく、全校児童の名前を知っているのだそうです。先生達がひとつになつて、児童一人ひと

りの個性を見ていこうとする空気の中で、子どもたちは安心して「自分」を発揮しているのでしょう。

「男女平等と言っても、高いところの作業などは自然に男子がやります。男だから…、女のくせに…、に続く言葉は否定的な内容になりますけれど、女らしさ、男らしさの後は肯定的なニュアンスが続きますね。本質的な性差に基づく「らしさ」が人間的な豊かさの中で自然と育つようになっています。」と横山副校長が補足されました。

小学校の卒業時には「誓いのことば」として将来の夢を一人ひとりが述べるそうです。その時の職業選択の多様さ、男女の垣根のなさには、先生方も驚かされると言います。スポーツ選手、宇宙飛行士、保育士、タレント、パティシエ…。子どもたちが自立に向けて、男女にとらわれず個々の主体性を育てることが伺えます。やまとなでしこを「なでしこジャパン」と言い換えた女子サッカーリーグの快挙で、女の子たちはいつそう夢の領域を膨らませたに違いありません。

体育朝会

